

日中形容詞の対照*

——連用修飾作用をめぐる——

鈴木 義 昭

日本人学生用の初級中国語テキストの形容詞の項には、

① 我们很努力.

a 私たちは努力家です.

(?)b 私たちは一生懸命です.

② 我们很努力学习.

a 私たちは一生懸命(に)勉強します.

1b 私たちは努力して勉強します.

等の例文が載っている¹⁾. 学生たちは、相当数の中国語辞典が「努力」を動詞のカテゴリの中に入れている²⁾にもかかわらず、器用にも①・②のaのような日本語訳(ただし、①・②ともbのような訳は少ない)を行なうのである. 辞典の採用する動詞の意味から離れた訳と言えるが、中国語においては、「努力」は形容詞として意識されている(『漢語三千常用詞表』等)³⁾. 逆に言えば、少なくとも辞典編纂者と中国人の詞性意識とがかけ離れていることを端無くも物語ることになるわけである.

①—aの文章では、本来形容詞述語文であるはずの中国語を日本語の名

*) 本稿は昭和61年度特定課題研究(早稲田大学)による研究成果の一部である.

1) 『基礎汉语課本』第一冊, 第十五課(外文出版社, 北京, 1980)

2) 『現代中国語辞典』(香坂順一編著, 光生館, 1982)・『中日大辞典』(愛知大学中日大辞典編纂処, 1973)等による. なお, 後者は品詞名を挙げないが, 訳によって判断した.

3) 同書(「語研」教材選書(9), 早稲田大学語学教育研究所, 1984)

詞述語文に置き換えている。翻訳におけるこうした異同は一まず措こう。

①—b「私たちは一生懸命です」の文において、大陸系、台湾系を問わず、中国人学生たちは「私たちは頑張っています」と訳すとともに、この訳に異和感を持っていない。しかし、われわれ日本人はこの文の持つある種の未完性、言い換えれば、何に対して「一生懸命」なのか分からない曖昧性を感じるのではなからうか。例えば、

③ 我们学习汉语，我们很努力。

などというコンテキストの中で、後半が与えられるならば、単独のものと比較してより落ち着きを感じるであろう。これには中国人学生も賛成である。そうした条件がないからこそ、日本人学生たちの多くが①—aのように、「努力家」という性質・属性を表す語を用いたものと思われる。川端善明の言い方に従えば、「すべての名詞は、述語であることのなかでその身代りを形容詞にもつ」ということになるう⁴⁾。

また一方、②—b の訳は動詞にこだわったものである。「努力」と「学習」とを動詞として並列したとすれば、さらに、

ic 私たちは努力しながら勉強する。

id 私たちは努力したり勉強したりする。

のような訳も出てくる。これら b~d に対して、われわれはやはり①—b に挙げたような落ち着きのなさを感じるのではあるまいか。要するに、②—b および c は「て」と「ながら」、d は動詞自体の性質、抽象的・具体的の相違によるものと思われる⁵⁾。つまり、「努力し」た結果、「勉強する」ようになったのではないし、「努力する」ことによって何かの「勉強」をするわけでもない。まして、「努力し」ていてさらに「勉強する」のでもないし、「努力する」と「勉強する」とは同類の行為ではないのである。よって、これらの訳は成立しない。誤訳ということができるのである。

以上、ごく簡単な例を見たわけであるが、形容詞と形容動詞、形容詞と

4) 『岩波講座 日本語 6 文法 I』所収、「用言」の項

5) 森田良行『基礎日本語』2 (角川書店「角川小辞典シリーズ」8, 1980)

名詞、形容詞と動詞、あるいは日中両語の形容詞の対照という膨大な領域の中に脚を踏み入れていることに気づくのである。そこで本稿では、以上の中から形容詞の連用修飾の問題に範囲を限定して、主として中国側からその働きについて考えてみたい。日本語は随時必要に応じて比較してゆくものとするが、ここでは、特別に断らない限り、日本語の形容詞・形容動詞は一括しておくことにする。

*

*

異なった語族に属する言語を比較することは容易ではない。しかも形態上の問題を単純に比較したところで、効果の挙がるものでもない。日本語形容詞は大別して二種、それぞれに五つの活用を持つが、中国語にはないとか、中国語形容詞の分類には、単音節、二音節、それ以上の音節といったものがある、重複のできるものとできないものがあるなどといったものがある、これらと日本語とは比較できないわけである。本稿では、日本語形容詞・連用形とその中国語訳とを眺めながら、問題を抽出していつてみることにする⁶⁾。

ところで、日本語形容詞の連用形に接続するケースとして、以下の七つがあるであろう。

1 否定

- ④ スイスは一年中暑くありません。

(瑞士整年都不曾热.)

- ⑤ あの花はきれいではない。

(那朵花不漂亮.)

2 変化

- ⑥ 風がだんだん強くなってきた。

(风越来越大了.)

6) 陳有光『日本語形容詞辞典』(衆文圖書股份有限公司, 台北, 1984) および呂叔湘主編『現代汉语八百詞』(商務印書館, 北京, 1981, 日本語訳は牛島徳次監訳『現代中国語用法辞典』, 現代出版, 1983) なお『日本語——』は語彙の選択, 日本語の文に一考ありたい。労作ゆえに惜しまれる。

- ⑦ この一帯は以前に比べてずっとにぎやかになった。

(这一带比以前热闹多了。)

3 過去・完了

- ⑧ さっきの子どもは非常に愛らしかった。

(刚才那个孩子太可爱了。)

- ⑨ 一年前、この辺は大変静かだった。

(一年前，这一带非常安静。)

4 副詞的作用

- ⑩ 今度ははやく来なさい。

(你下次快来吧！)

- ⑪ 田舎で夏休みを愉快に過ごした。

(我在农村愉快地度过了暑假。)

- ⑫ この壁は粗く塗ってある。

(这墙壁塗得粗糙。)

- ⑬ 面接試験を二十分も受けて、実に息苦しく感じた。

(接受了二十分钟的口试，实在觉得好难受。)

5 中止法

- ⑭ 二階は静かで、誰もいないようだ。

(二楼很静，好象一个人都不在。)

- ⑮ アルミニウム製品はさびにくくて軽く、しかもかなり丈夫だ。

(铝製品轻而不易生锈，并且相当堅固。)

6 前提法

- ⑯ 圧力が強ければ / 強かったら、反動力も強いだろう。

(压力愈大，反作用力也愈大。)

- ⑰ どんなに口が上手でも / 上手だって、私はだまされない。

(不管怎样能説会道，我也不会受騙。)

7 並列

- ⑱ 時々楽しかったり悲しかったりして、自分でも自分の気持ちが分

からない。

(时而快东, 时而悲伤, 连自己也不知道自己的心情.)

- ⑩ この近海は穏やかだったり波立ったりして, 変化が大変激しい。

(这近海附近, 一会儿风平浪静, 一会儿波涛汹涌, 真是瞬息万变.)

以上, ④~⑩の例文と()内に示した中国語訳からだけでも, いくつかの点が指摘できるであろう。

中国語では, 1に見られるように, 形容詞である「热」が副詞「不」の修飾を受ける, つまり, 形容詞が副詞「不」で打ち消されるのであって, 副詞「不」の修飾を受けることが動詞・形容詞たる条件の一つである⁷⁾。日本語では用言の連用形+助動詞「ない」がその働きをする。翻って言えば, それが用言(用言起源の助動詞も含む)の条件でもある。否定性を持つ語の修飾・被修飾の作用によって, 文としての否定が成立すると言えるであろう。この場合, 中国語と違って, 前置の修飾・被修飾ではなく, 後置成分に助動詞を用いているものが主流である。

2は, 「了」をつけることにより形容詞が変化を示し得るということである。すなわち, 「了」を直後に後置できることが, 中国語動詞・形容詞の条件の一つとなっている。ただ, 「了」は名詞や量詞にも付くことができるので, 必要十分な条件というわけではない。「了」は例文の()内に付した訳文からすると, この形容詞「大」・「熱鬧」を動詞化する働きを持っているかのように見える。しかし, だからといって, それを直接に「~になる」という意味要素を分担しているとするにはなお疑問が残る⁸⁾。ただ, 形容詞は述語の一つとして, 主として状態を表わし, しかも, 「了」をつけることによって, 状態が変化するところまでを表すことができると考えるのがよいであろう。事実, それ以外の作用, 動作そのもの・受身・使役

7) 丁声树等著『現代汉语语法讲稿』(『中国语文丛书』所收, 商务印书馆, 1979) による

8) 拙論「現代における形容詞+『了』について」(1)(早稲田大学語学教育研究所『ILT NEWS』vol. 80)

等を表す働きは動詞が負っているからである。したがって、形容詞につく「了」は変化を示す指標と考えてもよいかもしれない⁹⁾。

3は、中国語の所謂「実辞」がテンスの上からは、副詞的な語句に左右されるということである。むろん、2に挙げた助詞「了」や助詞「过」は過去・完了・経験等を表すことができる。しかし、これは絶対的な条件ではなく、「一年前、这一带非常安静。」という時、「一年前」という時間詞があれば、これが「過去」を表しているために他の要素は不要である。むしろ、日本人学生が中国語訳をする時、「静かだった」の「た」に引かれて⑨の「安静」に「了」をつけ、文意を誤ることが多々ある¹⁰⁾。

4は次項で詳述するように、漢語では形容詞の連用修飾の形が日本語以上に多種多様であることを示している。

5~7は所謂「復句」(「複文」)の問題である。現在、「復句」は大きくは「联合复句」、「偏正复句」、「多重复句」の三つに大別されている¹¹⁾。しかし、その下部分類になると、枚挙に暇がないほどで、あたかも日本語が助詞「て」、「で」を用いて相当の種類の文意を表すのと以ている。基本的には接続詞・副詞を用いたり、そうした語の連語を用いたりするものと、それを用いないものの二種類があると言えよう。そうしたものの中には句として連用修飾の働きをするものもあるが、本稿では省略する。

* *

一般に、形容詞の最も大きな特徴は述語になること、名詞を修飾すること、副詞の修飾を受けること等々とされるが、日中両語もその意味では例外ではない。ただ、日本語においては、さらに4に挙げたように、形容詞の連用形は等しく連用修飾作用をする。それでは中国語形容詞においてはどうか。

9) 8に同じ。

10) もしこれに「了」をつけると、「一年前、この一帯は非常に静かになった。」(下線筆者)となる。

11) 刘月华等著『实用现代汉语语法』(外语教学与研究出版社、北京、1983) および『现代汉语语法讲话』等による。

4—⑩～⑬の用例は日本語形容詞が連用修飾の形を採っているものである。以下の(1)～(4)はそれを中国語文法に当てはめ、仮の分類を行ったものである。

- 1) 形容詞(?) + 動詞
- 2) 形容詞 + 「地」 + 動詞
- 3) 動詞 + 「得」 + 形容詞
- 4) 構造の変換

まず、1)の「你下次快来吧!」であるが、この形はわれわれを混乱に陥れる。表面的には、形容詞 + 動詞の形を採っているが、「常用詞表」ではこの「快」を形容詞と副詞の二項に亘って収録する。二種類の品詞を持っているのであるから、形容詞 + 動詞ではなくて、副詞 + 動詞の形と考えることができる。そうすれば、副詞が動詞を修飾した形になって、よりすっきりするというものである。英語の場合、形容詞起源の副詞には「-ly」などのマーカーがついていて分かりやすい。日本語ではそれを連用形活用語尾「ク」・「ニ」が明示する。それでは中国語の場合はどうであろうか。結論を先に言うならば、動詞の前に形容詞を置けばいい。それは「雪白」・「草緑」・「灰白」・「冰冷」等の形容詞を考えるとよく分かる。元来「雪」・「草」・「灰」・「冰」は名詞であるが、後の形容詞を「～のように」という形で修飾しているからである。にもかかわらず、品詞を二つに分けるのは何故かと言えば、大方の中国人が、形式が変わったり、意味が変われば、品詞が変わると意識しているからであろう¹²⁾。こうした二つの品詞に分かれる形容詞に、「直」・「怪」・「老」・「全」・「白」・「光」・「偏」・「死」等がある¹³⁾。これらはいずれも古代中国語においては、形容詞として意識されたものである。古代中国語から現代中国語に移ってゆく過程で、そうした、意味の混同を受けやすいものは、他の要素(多音節化——品詞の独自性を表す接尾辞の添加等)が付け加えられることによって、これを防いできた

12) 11 および任学良編著『汉英比較语法』(中国社会科学出版社、北京、1981)

13) 11に同じ。

わけである。

以上のことから考えて、位置が品詞を決定する中国語においては、形容詞が前から動詞を修飾するというより、形容詞から独立した一部の語（特に単音節語）は動詞・形容詞を修飾することができるといった方が正確かもしれない。「远看」・「大干快上」・「平放在桌上」における「远」・「大」・「快」・「平」等はいずれも単音節の形容詞だからである¹⁴⁾。なお、われわれの目に形容詞+動詞の形と思わせるのは、日本語が漢語を摂取した際、その漢字に対応させるのに苦慮し、当該漢字にたまたまあった形容詞の意味に着目し、日本語形容詞・形容動詞の連用形に置き換えて訓んだところから来るものであろうが、後稿を期したい。

次いで、4—④は先に述べた多音節化された形容詞の一例である。この形は比較的理解しやすい。この例では接尾辞（助詞）「地」が用いられている。「地」はそもそもは文字通りに、「土地・場所の意味であるが、転じて動作や状態の存在をあらわすようになり、副詞的修飾語に用いられる傾向ようになった」とされ、「唐以後多く用いられる傾向がある」と言われる¹⁴⁾（下線、引用者）。こうした「地」を用いることによって、中国語では形容詞を動詞の前に置くことができるようになったと言える。つまり、「地」は形容詞が副詞的働きを行っていることのマーカーとなっているのである。前述の英語の形容詞に「-ly」を加えて副詞を作る作用によく似ている。また一方から言えば、「地」という場所性を表す語を付加することによって、副詞的な地位を得たと考えられるわけである。すなわち、他の言語でもそうであるが、場所詞は時間詞と同じく、連用修飾語となるのである。ただ、ここで注意しておかねばならないことは、この「地」の付く形態で最も多いのが形容詞であるが、それだけに限られないということである。中国語は比較的自由的な造語力を持っているため、例えば、「雨不亭地下」（「雨がやむことなく降る」）、「科学地论证」（「科学的に論証する」）

14) 太田辰夫『中国語歴史文法』（江南書院、1958）

となることができる¹⁵⁾。「不停」は副詞＋動詞、「科学」はそれ自体名詞である。その他、「自言自语地说」(「一人ごとを言うように話す」)、「一个字一个字(地)念」(「一字一字読む」)など、いずれも四字句であったり、数量詞句であったりする。

4—⑫「这墙壁塗得粗糙」は動詞＋「得」＋形容詞の構文を採る形容詞補語文である。そもそも漢語で言う補語とは、動詞あるいは形容詞の後ろに在って、それを補充・説明するものを指す¹⁶⁾。⑫の文では、「この壁」の「塗り方」はどのようなのか、「この壁の塗り方は粗い」、「この壁は粗く塗ってある」ということになり、形容詞「粗糙」は動詞「塗」を補足説明しているわけである。このような助詞「得」を用いた文を程度補語の文と言う。⑫は「塗」った程度が「粗」いということで、程度を補っているのである。例えば、古代中国語で、

② 待之極晏。(之を待すること極めて晏し。)

② 向河立待良久。(河に向ひて立ちて待つこと良(やや)久し。)

② 恐懼殊甚。(恐懼することを殊に甚し。)

とある時、a の「極」は形容詞「晏」を前から修飾している形を採りながら、連語「極晏」が動詞「待」を後ろから修飾した形になっている。b の副詞「良」は形容詞「久」を修飾しつつ、連語「良久」となって、複合動詞「立待」を修飾する。c でも副詞「殊」が形容詞「甚」を修飾しながら、連語「殊甚」の形で、動詞「恐懼」を後置修飾しているのである。この時、わが国の訓読では、()内に示したように、述語でありながら体言化名詞「こと」をつけて、主語に近い扱いをしている。しかし、中国語の語法から言えば、いずれもここで取り上げた程度補語の構文である¹⁷⁾。

現代漢語の例をもう少し挙げる。

15) 吕叔湘, 前掲書

16) 丁声树, 前掲書

17) 拙論「形式名詞『こと』の用法」——感動表現について (1)——(早稲田実業学校『研究紀要』, vol. 18)

- ②③ 今天早上我起得早。
(今朝私は早く起きた。)
- ②④ 他跑步跑得很快。
(彼は速く走る / マラソンが速い。)
- ②⑤ 活得堂堂正正是人的至上目标。
(正々堂々と生きるのが人間最高の目標だ。)
- ②⑥ 晒得漆黑的皮膚一阵阵刺痛着。
(真黒に焼いた皮膚がチクリチクリと痛む。)

等の例文で、形容詞「早」・「快」・「堂堂正正」・「漆黑」はいずれも「得」を介して、動詞「起」・「跑步」・「活」・「晒」を後置修飾していると考えられる。なお、「塗り方が粗い」という訳し方は、漢文訓読文「～すること」の系列を引くもので、そうした背景には日本語に修飾語が後ろから修飾するという習慣がなかったという事情がある。その意味では、これらの構文は形容詞が動詞・形容詞を修飾する連用修飾の文と言わねばならないであろう。

その他に、動詞 / 形容詞+「得」+動詞、動詞 / 形容詞+「得」+小句、動詞+「得」+名詞+動詞、動詞 / 形容詞+「得」+很、形容詞+「得」+很、動詞 / 形容詞+「得」等の構文がある¹⁸⁾。また、その他に動量詞構文(時間・場所・回数を表す補語文)もあって、いずれも後置の連用修飾作用をしているが、ここでは省略する。

なお、⑬の例文は「得」を用いて、どのくらい知っているか、感じているかを表すものであるが、これもここでは説明を省略する。

* *

すでに述べてきたように、中国語の形容詞には日本語で言う形容動詞はない。しかし、その基本的用法に差異はない。①の例文は形容詞が述語となることができることを物語っているし、例を挙げることはしなかった

18) 呂叔湘, 前掲書

が、名詞を限定できることは言うまでもないであろう。本稿では、日本語の行っている連用修飾をどのように果たしているかを眺めてきたわけである。その結果は中国語形容詞も前置・後置の違いはあるが、所謂用言的なものを修飾できるということを再確認した。ただ、前置修飾の場合、「地」が与えられたもの以外、すべての形容詞ができるのではなく、単音節でしかも古代漢語から未分化と見えるものがそれを担い、残りの大部分は時には「得」を与えられつつ、後置修飾の形を取るのである。この時は言うまでもなく、「得」がそれに先行しなければならない。中国人は単音節的形容詞の中の前置修飾作用を持つものを意識的に副詞の範疇に押し込めているが、それ自体位置を得ることによって副詞になれたと言うべきであろう。